

OG訪問

今回紹介するのは海外で働く卒業生。ジャズ発祥の地として知られるアメリカ南部ルイジアナ州ニューオーリンズに広大な敷地を有し、退役軍人（ベテラン）にヘルスケアを提供するベテランズホスピタルの歯科医師、テリオ志保さんです。

ベテランズホスピタル（アメリカルイジアナ州）歯科医師

Ms. Shiho Theriot（旧姓：玉井 志保さん）

（歯学部歯学科1990年卒業）



大規模な国営病院

志保さんが勤務するベテランズホスピタルは、その名の通り退役軍人のための国営病院です。身体的、精神的疾患のあらゆる診療科を揃えるほか、薬物中毒やホームレス、自殺など退役軍人にハイリスクとされる問題に対処するプログラムも充実、近年はLGBTQのサポートにも力を入れています。コロナ禍前は年間約4万5000人の退役軍人に医療サービスを提供していた病院は敷地も広大、志保さんはいつもランチ持参で出勤しているそうです。「だって歯科からカフェテリアまで歩くと15分はかかるんです（笑）」。

話を聞く歯科医師

歯科には一般歯科4人、歯周病専門1人の歯科医師が在籍。志保さんは一般歯科で20代～90代の患者さんのすべての症状の治療にあたるほか口腔外科も担当し手術にも入り、口腔がんも顎顔面補綴*も手がけます。

（※病気やその治療、また外傷で失われた口腔、顎、顔面の機能や組織を補う治療）

診療は朝7時45分から夕方4時までですが、志保さんは毎日診療後2時間ほどを電話などでの患者さんサポートの時間に充てています。「患者さんはすべて戦争体験という特殊なバックグラウンドをもち、程度の差はあれPTSDがあります。口の中以外の身体的、精神的問題を見極めて治療を考えることが歯科医師にも必要です。患者さんを理解するための時間を惜しんではいけないと思っています」。現在、治療によっては予約前24時間以内のPCR検査を義務付けるなど感染症対策をとり、1日の患者数も通常の50%に抑え、予約は3カ月先まで埋まっているそうです。この状況下、1本の電話が患者さんの心をもじかすると命を救うことだってあるかもしれません。

絶え間なきチャレンジ

「中学時代からいつかは留学と思っていました。海外で働くことまでは考えていませんでした」と志保さん。本学卒業後、研修医をした東京医科歯科大学で顎顔面補綴の面白さに出会い、留学の目的に定めました。その後一般歯科医院で臨床力を鍛えなが

ら資金を貯め、卒後7年で渡米。UCLAのプリセプターシップでアドバンスインプラント学、顎顔面補綴学を学ぶ中で、確立されたがん患者のトータルケア、チーム医療にも刺激を受けたといいます。そしてルイジアナ州立大学歯学部の研究員、助教授を経て、2008年現職に就きました。途中、結婚を機にアメリカ永住を決意、国家試験と州の試験に合格してアメリカの歯科医師免許を取得しました。「夕方5時まで働き6時から深夜0時までは睡眠、0時から朝6時まで勉強し、出勤するという生活を3年続けました。30歳を過ぎて日本では開業した同期もいる中、基礎系科目からの学び直しは自分との闘いでした。でも大変だったあの時間が、その後の人生の充実度を高めています」。

限界は決めない

「冒険心、好奇心が強い」という志保さんが単身渡米し自らの力で切り開いてきた道のりは、成長とともに新たに現れる目標へのチャレンジの連続でした。「若い頃は、一つのことに集中して3年、4年、取り組むなんて長く感じますが、振り返るとそんなことはないんです。やりたいと思ったことはやる。壁は高いほど乗り越えたときの達成感は大きく、努力は自信になります。受験生や後輩には、自分で自分の限界を決めることはしないで、と言いたいです」。ぶれない自分軸をもった自己実現力のモデルのような志保さんの言葉、説得力もひときわです。

ひたむきな努力をジェネラリストとして開花させた志保さんにやりがいを尋ねると、「自分の治療に満足してくれた患者さんの笑顔、これに尽きます」と即座に答えが返ってきました。モットーは「患者さんを自分の両親、家族と思って治療にあたること」。どの国で、どんな言語で、どんな患者さんを診ていても、歯科医師の本質は変わらないということですね。



ベトナム戦争の退役軍人Daniel Higginsさん（前列中央キャップとジーンズ着用）が2019年のD-Dayに治療で来院した際の写真。D-Dayは1944年6月6日、連合国軍がフランス・ノルマンディー海岸に上陸した軍事記念日で、Danielさんの祖父Andrew Higginsさんは同作戦の功労者として知られています。（右から3人目が志保さん）